

「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」展によせて

昨年 2016 年はシーボルト（フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト）が亡くなってから 150 年にあたる年であった。千葉県佐倉市にある歴史民俗博物館では、「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」展が開催された。（2016 年 7 月 12 日～9 月 4 日）これまでもシーボルトに関する展示会は多数開かれているが、今回の展示会はシーボルトが第二次来日時（1859 年～1862 年）に収集した資料を中心に、シーボルトの子孫にあたるドイツシュルヒテルン在住のフォン・ブランデンシュタイン・ツェッペリン家が所蔵する資料等も含めて、シーボルトが構想していた日本博物館の実態にせまるものであった。

現在、ドイツのミュンヘン五大陸博物館（旧称バイエルン国立民族学博物館）にはシーボルトが第二次来日時に収集した約 6000 点に及ぶ資料が収蔵されているが、今回の展示では特に、シーボルトがミュンヘンにおける最後の日本展示（1866 年 3 月）をどのように構成し、そこから彼が日本博物館をどのように構想していたかを復元し展示していた。陶磁器や漆器、ブロンズ製品や仏像等、シーボルトが第二次来日の際に長崎や江戸で収集したものが多数展示されていたが、保存状態は極めて良く、中には置紙に包まれたままの書籍も見られた。

また、今回の展示にはモノだけでなく、それを裏付ける文書も併せて展示されており、そのモノがどのような経緯を経てシーボルトの所蔵となったのかそのことが伺われる内容になっていた。今回の展示は、歴史学だけでなく漆器や陶磁器等様々な分野の研究者が長年にわたって調査研究を行ってきた成果が随所に見られた。例えば、鶴の文様が浮き出た青色の大きな植木鉢（展示図録番号 195：瑠璃釉鶴文大植木鉢）が展示されていたが、これはかつて鳴滝塾で指導を受け、当時は神田にあった幕府直営の種痘所の蘭方医達から贈られたものであることが桜庭美咲氏（国立歴史民俗博物館機関研究員）によって明らかにされたものである。展示では、そのことを記した文書（展示図録番号 280：目録箱入植木鉢）も併せて示されていた。他にも、展示された天神坐像（展示図録番号 210）はその台座に記された文字から、長崎酒屋町の仏師九臈斎が製作したものであること、シーボルトの資料収集を仲介した人物が同じ長崎酒屋町の笠戸正胤であること等が原田博二氏（長崎純心大学講師）により明らかにされたのである。これまで、シーボルトの収集品がどのような人物の仲介によるものなのかは不明であったが、今回の展示に伴う調査研究によって、その一端が明らかになった意義は大きいといえよう。

こうした展示品の中で、筆者が最も興味を持ったのが今回初めてその存在が明らかとなった「カラフト図」と「日本地図」の写しである。以前筆者は、オランダのライデンでシーボルト持ち帰りの資料調査を行い、シーボルトの著書『日本』の中に収録されたカラフト図の原図が、現在はライデン大学図書館にあり、しかもその地図をシーボルトに贈った人物が北方探検家の最上徳内であることを明らかにした。（「ライデンに於けるシーボルト蒐集地図について」（『東海大学紀要文学部 第 33 号 1980）原図がライデン大学図書館にあることは明らかとなったが、シーボルトがこのカラフト図の写しを作成していたことはこれまで知られていなかった。それが、今回展示された資料（展示図録番号 44：蝦夷図写および唐太島之図写、同番号 46：蝦夷図写）によって、写しが子孫のフォン・ブランデンシュタイン・ツェッペリン家にあることがはっきりしたのである。

もう一点が「日本地図」（展示図録番号 43：伊能特別小図写（西日本））である。シーボルト事件

の発端にもなった天文方高橋景保からシーボルトに渡ったとされる「日本地図」については、伊能忠敬作成の日本図の特別小図とされ、この地図は事件の際シーボルトから取り戻し、現在国立国会図書館に所蔵されている。しかし、『日本』にはこの伊能の特別小図に基づく日本地図が収録されていることから、シーボルトはこの写しを所持し、そして『日本』の中にこの日本地図も収録したわけであるが、その写しがどのようなものか、現在それはどこにあるのか長い間不明であった。今回の展示に関わり長年にわたって調査研究をおこなってきた青山宏夫氏（国立歴史民俗博物館教授）らの努力によって、今回初めて西日本部分の地図の写しがフォン・ブランデンシュタイン・ツェッペリン家にあることが示されたのである。大谷亮吉氏の研究以来、長年にわたる謎が解明された出来事として新聞にもそのことが大きく報じられたことは、記憶に新しいところである。（『読売新聞』朝刊 23 面「伊能図」の写し欧州に」2016 年 6 月 29 日）今後解明すべきこととして、「日本地図」の写しを作成した人物は誰なのか、作成時期はいつなのか等、新たな課題も出てきたといえよう。

筆者は大学院の時代に恩師箭内健次先生の指導でシーボルトに出会い、今日までフィリップをはじめ、息子のアレクサンダーやハインリッヒ、娘のイネについての研究をおこなってきた。30 年前にオランダでみたカラフト図の原図の写しと出会い、また日本図の原図の写しと出会うことができたことは、今回の展示会のおかげであると思う。そうしたことで、今回の展示に関わった関係者には心から御礼を述べたい。研究は継承されていかなければならない。呉 秀三氏以来、多くの研究者によって行われてきたシーボルト研究は、外国の研究者を含む国際的な研究となっている。今回の展示に関わるこれまでの調査研究の成果は、展示会で示されただけでない。ミュンヘン五大陸博物館のシーボルトコレクションは全点画像付データベースとして、2016 年 3 月から国立歴史民俗博物館のホームページ上で一般公開されている。こうして示された資料や研究成果が契機となり、今後シーボルト研究が益々発展することを期待したい。

なお、「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」展は 2016 年 7 月から 2017 年 10 月までの期間に、国立歴史民俗博物館、東京都江戸東京博物館、長崎歴史文化博物館、名古屋市博物館、国立民族学博物館の各会場で開催の予定である。今回の展示を多くの人々が見ることで、近世日本の姿を実感すると共に、「文明」という視点から人類共通の歴史的遺産を保存継承することの意義について考えるよい機会にしたいと思う。

東海大学現代教養センター教授
沓 澤 宣 賢

参考文献

- ・国立歴史民俗博物館監修『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』（青幻舎 2016）
- ・国立歴史民俗博物館編集『歴博国際シンポジウム シーボルト・コレクションから考える Exploring the Siebold Collection of Museum Fünf Kontinente』（国立歴史民俗博物館 2016）